すいかずら

平成17年8月31日発行
編　集　社寺建造物美術協議会
発行人　澤野道玄

〒604-8232　京都市中京区錦小路通
油小路東入る空也町491
㈱さわの道玄 内
TEL (075)254-3885　FAX (075)254-3886

『第十六回』通常総会及び研修会開催

（京都府京都市にて）

平成十六年十月三十日に第十六回、研修会を含む通常総会を開くに当り、会場を京都市内に定めました。この度の研修会は催し物に便乗する形となりましたが、文化財保存技術「匠（たくみ）の技」展が京都市内で開かれ、フィールドワークとして、世界文化遺産登録の元離宮「二条城」の国宝、二の丸御殿が選ばれて、当協議会の森本安之助副会長が、国の選定保存技術認定保持者であり、実技と講演を京都市東山区にある、京都市文化財建造物保存技術研修センターで行った後に、「二条城」で金工部門の研修会をかねて、桃山時代の最高水準の技術を網羅した錺金具の解説をされる御計画で私達もそこへ参加することに致しました。京都市文化財保護課、石崎課長、圖越補佐も御担当として、出席されました。今年度の予定としての金工部門の研修が実施できました。

当協議会の来賓として㈳全国国宝重要文化財所有者連盟事務局長の後藤佐雅夫様が来場され、会員からは荒木彩色部会長（川面美術研究所）、澤野道玄（さわの道玄）、酒井清（さかい）、大谷哲泰（大谷鋳造所）、横山哲明（横山金具工房）、小西陳雄・齊藤信二（小西美術工藝社）が出席し、前述の森本安之助副会長（森本錺金具）を含め、七社の参加となりました。

二の丸御殿は文禄年間の豊臣秀吉が残した遺構と慶長年間に徳川家康がたてた建築の中に徳川家光がつくらせた絵画や彫刻などが抱合された、桃山時代の様式が整えられ、武家書院造りの豪華絢爛を極めた装飾は当代一流の技術を今に伝えているものです。中でも錺金具の素晴らしさは、長押の花熨斗形（はなのしがた）の釘隠しなど、銅の地金に金張りを施した、すべて手彫りのものです。折上げ格天井、二重折上げ格天井、欄間縁八双、襖引手など重厚な造りの金具で凝った意匠の逸品揃いです。

この日は土曜日だったためか、他の観客と一緒に見学をする形となりましたが、森本副会長の懇切丁寧な解説で、念入りに研修する事が出来、参加会員からも感謝申し上げる次第であります。第一日の恒例の懇親会は「ルビノ京都堀川」へ設営して、賑やかに行なわれました。

翌、十月三十一日に同所の会議室で午前九時から、通常総会が開催されました。まず、先立って㈳全国国宝重要文化財所有者連盟、事務局長の後藤佐雅夫先生から「禅宗方丈の変遷」と題して、有益な講演を拝聴いたしました。日本住宅の歴史という視点で古代の住居から説き起こされ、奈良・平安・鎌倉・室町・桃山・江戸の各時代の建築の特徴と流れについて、資料を用意され、写真・図版など詳細に御教示頂き、予定時間では、足らない位、充実したお話を頂きました。

小憩の後、総会に入り、会則により小西会長が議長を勤めましたが、第一号議案の現在収支状況の報告が齋藤事務局員から報告され了承頂いた後、小西会長から退任願が森本副会長宛提出され、受理されました。直ちに第二号議案の役員改選に移り、次期会長選任につき審議いたしましたが、仲々決定を見るに至らず、副会長などから、小西会長への意見打診があり、私見で恐縮だが、従来の事業面、活動（文化庁・文技協会への陳情・請願に）熱心な方で当協議会三部門の内二部門を業態としておられる事で、「さわの道玄」会員を推挙したい、と提案が出ました。

出席会員に、この案を図り、全員一致で澤野会員にお願いし、澤野会員が「それでは新年度からお受けいたします」と受諾されましたので、新会長が決定いたしました。今年度内の事務取扱い、継続的な小事業は現在の形で年度末まで進め、遅滞なき様引き継ぎに努める事になりました。

第三号議案は次年度計画案ですが、（イ）『芸術文化振興基金』による技術研修会は出席会員に図り、賛意を得ましたので、早速、当該基金交付の申請をすることになりました。事務局で十二月上旬までに計画案を作り『芸術文化振興基金』に申請をします。（ロ）の当協議会の「会員増強」の件ですが、会員相互の情報交換により対象を展げて行く方針を確認、積極的に勧誘する方向で進むことになりました。平成十六年度に入り、京都市、横山金具工房代表、横山義雄様（国の選定保存技術認定保持者）が入会をされました。その後の変遷として、この通常総会前に在来会員だった㈱金寿堂、代表、黄地耕造会員と、㈱青銅社、代表、稲見晃会員から退会届が出て居りましたので、プラス一、マイナス二となり危機感を強く受けた次第です。

《この会報が出る頃には既に過去形になりますから、ご報告いたしますと、通常総会後、十一月に京都市、邑田漆芸㈱代表、邑田正廣様、及び長野県楢川村、㈶木曽地域地場産業振興センター、理事長、田中今朝春様の入会が確定いたしましたので会員数は通算プラス一となりました。推薦人は「さわの道玄、澤野道玄」と「小西美術工藝社、小西陳雄」であります。御了承を頂きたく存じます。更に別の方に勧誘を続けておりますが、決まっておりません。皆様もどうか、心当たりの方々に呼びかけて頂ければと存じます。継続性のある方が望ましく、責任がある推薦人（会員）は、二名必要といたします。追而、「さわの道玄」新会長と相談してこの二社入会については、会員諸氏にお計りする時間的な余裕が無かったため入会金は五万（前例）、年会費は、半期二万五千円とさせて頂きました。》

（八）その他の件として、年度内刊行予定の「社寺建造物美術標準仕様必携書」毎年度末分は、内容面の補足、その他を改定しても今年度内にまとめること。今からでも間に合うならば、希望会員他の広告掲載なども検討・実施すること。新しい人事関係は澤野道玄新会長に一任すること、などを主要テーマとして、申し合わせました。

（この項、終り）

〔就任ご挨拶〕

澤野道玄

この度、平成十七年四月より当協議会会長に就任いたしました。

近年当業界をとりまく環境は非常に厳しく、とりわけ専門工事量の年々の減少傾向は憂慮すべき状態であります。この事態に対応すべく当協議会の体制も一新し万一に備えております。

もとより当協議会会員各社の品質と経営体質の向上は申すまでもなく努力するところですが、尚一層のご指導ご鞭撻とご賢察をお願いし、就任のご挨拶とさせて頂きます。

〔退任ご挨拶〕

小西陳雄

この度、平成十七年三月を以て当協議会々長を退任いたしました。

平成二年の当会発足以来、会員諸氏のご支援とご協力を頂き、何とか勤めさせて頂きました事を心から御礼申し上げ、退任のご挨拶とさせていただきます。

『錺（かざり）の響（こえ）』

森本錺金具製作所　森本安之助

この『錺の響』は平成十四年四月から産経新聞・西日本版「美とくらし」欄に月二回掲載されたものを同氏の許可（並びに、産経新聞、支局長の承諾）を受けて転載したものです。

注――森本安之助氏は錺金具の技術で、国の「選定保存技術保持者認定」を受けておられ、今も現役で活躍されておられる斯界の第一人者で、当競技会の副会長をしておられます。

建物の輪郭を整える

お盆が近づくにつれ、お寺や神社では年中行事の「万燈会」が催される。参道、境内、建物の随所に多くの燈明を供えることによって、懺悔（さんげ）と罪滅ぼしの功徳を授かるといわれ、奈良時代から続いている東大寺や春日大社のそれは、とりわけ有名である。

最近は会期中だけ置かれる簡単な箱型の和紙燈籠も増えたが、永代的に使われる燈籠類は古くから石や木、鉄、銅を用いて作られている。

たとえば、春日大社の釣り燈籠〔写真〕。

銅金鍍金製で、笠（屋根）は方形または六角で、火袋（ひぶくろ）は四角か六角。意匠は特に火袋に重点がおかれ、燈明を美しく洩らすため、「陽（よう）透かし彫り」や「陰透かし彫り」の技法を用いる。

春日大社の釣り燈籠＝「建物の輪郭を整える」より

陽透かしは、葉なら葉、花なら花を見たまま、浮き彫りのように彫り出す技法。陰透かしは、葉の葉脈だけを残して切りぬいて葉を表現する。春日燈籠の文様は、神のお使いである鹿、紅葉、藤の花が多用されている。

二つの技法の使い分けには特に決まりはなく、文様に応じて併用することもある。雲や波、亀甲やウロコなどの幾何学文様、植物、唐草文様なども使われる。

ともあれ燈籠は、ただ「あかり」を灯す機能だけでなく、境内をはじめ建物の輪郭を整える意義があるのはいうまでもない。美術工芸品としても遜色（そんしょく）のないものが数多く見られ、国宝や重要文化財に指定されているものも少なくない。

これらの仕事も錺職の手技であり、寄進者のお心を思い、わたしどもは製作に励んでいる。

自然への畏敬の念

錺金具といいますと、金属だけが相手と思われがちですが、実はさまざまな自然の助けを借りなければできない仕事です。

伝統技法である金銷（きんけし）には、稲の苗を乾燥した苗藁（なえわら）を磨きに。生育した稲は、あく抜きの藁灰に。カヤは、乾したものを煎じて色仕上の汁に。杉などのカンナ屑は、「燻（くす）べ」といって、着色するものに使います。

また、付属品として、牛、鹿、馬などの動物の皮革や毛、鳥類の羽も使います。

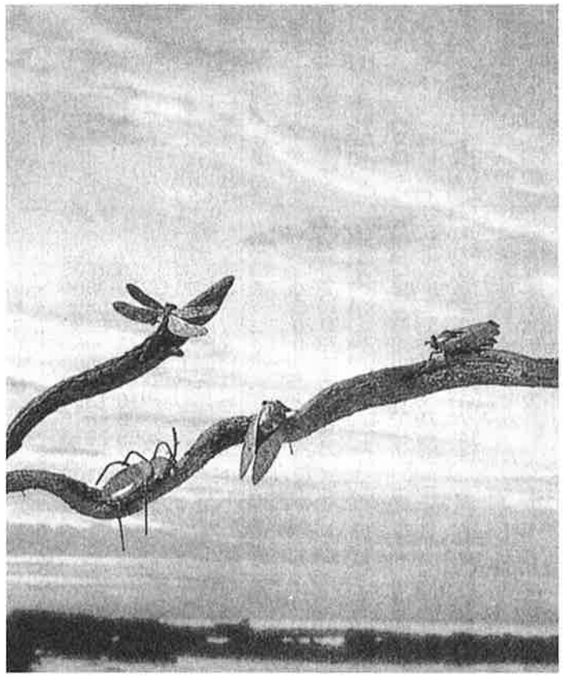
いまから十数年前、第六十一回伊勢神宮御遷宮の御神宝の内、金銅銅黒太刀拵（こんどうどうぐろたちごしらえ）を謹製したときの経験ですが、柄につけるカラスの羽で難儀したことがあります。

元来、「カラスの羽は濡れ羽色」といわれるように漆黒という認識があります。しかし、送られてきたのは羽もまばらな〝白髪〟まじり。百数十枚を揃えるのに、三年越しで二千数百枚の中から厳選したような始末で、唖然たるものがありました。人の営みは、自然の恵みによって成り立っています。

古来、武士は洒落家と強さをより強調するために折々、甲冑に虫の文様を取り入れたといいます。蝶の優美、蜻蛉（とんぼ）は勝利を

もたらす縁起かつぎ。蜂は小粒ながら侮れぬ覇気を。毛虫は「葉＝刃」を喰う。蟷螂は寄ると恐ろしい、というふうに…。

環境問題が取り上げられて久しい今、われわれは何をなすべきか。それは、人間が破壊したものを深刻に受け止め、自然に対して畏敬の念をもって向き合うことではないでしょうか。



「自然への畏敬の念」より

後進を育てる

父が他界し、この業を継いだのは昭和四十四年でした。あまりに突然のことで、一時は途方にくれました。

その折、先代と交誼の深かったS氏から、神社の破風金具の制作発注をいただきました。S氏は、さる名刹御用達の棟梁で、設計はもちろんのこと、神社仏閣で使われる木や金属を素材にした法具・調度品、錺金具などに精通され、当然、それらの図面は自分でひかれ、細部にいたるまで原寸図で注文されていました。

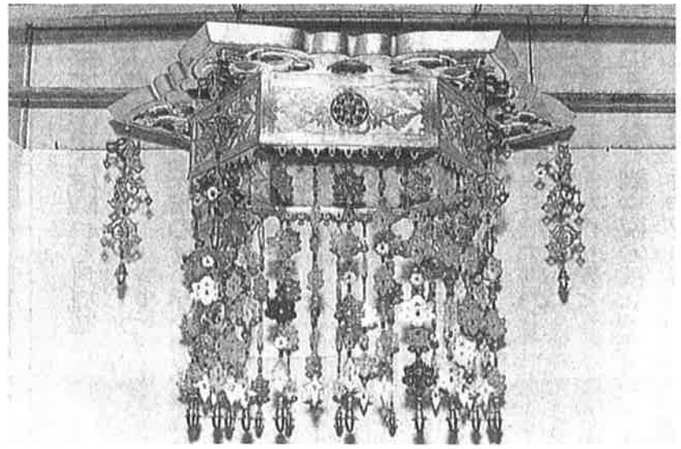
写真の天蓋もS氏の設計によるものです。

しかし、わたしへの発注は「あんたが図面を描いて作ってくれたらいい」というもの。こちらは、今まで通り原寸図をもらって仕事をすればいいと思っていたので、頭を抱えました。おまけに、書は好きで少しばかり自信もあったのですが、絵は苦手。

何度も「図面を…」と打診したのですが、「あんたが描け」の一点張り。もうやるしかないと、意匠を考え、苦労のあげく原寸図をまがりなりにも描き上げました。そしてその厳しい指導のおかげで、「図案がなければ自分の人生はない」という覚悟ができ、今日まで仕事ができる人間になれたと感謝しています。

ひるがえって、いま、そういう何事にも精通し、損得抜きで若い者を育てようという人はどれほどおられるでしょう。

仕事に限らず、人生も我ひとりでは生きられません。多くの縁ある人たちの温かい情け、さまざまな教えにより生かされている喜びに感謝し、少しでも世の中にお役に立てればと痛感しています。



天蓋の写真＝「後進を育てる」より

素地拵え

今回は趣を変え、錺の手順や道具類のあらましを紹介しましょう。

まず、錺づくりの手順として最初に行うのは、寸法や取り付ける個所の形を取る「型取り」です。

平面は紙をあてがってなぞるだけですが、曲面になると紙を切ったり、糊付けをして正確な形を取ります。これが仕事の基本になりますから、神経を集中して作業をせねばなりません。

形刷きのようす＝「素地拵え」より

次に、意匠を考慮した原寸図を作ります。もちろん、文様も同時に描きます。素材の銅板は「定尺」（一二〇〇ミリ×三六〇ミリ）を基本寸法とし、ほかに「大板」（一〇〇〇ミリ×二〇〇〇ミリ）があります。

そして「型拵え」。型拵えには、柿渋で加工された渋紙を使います。渋紙から輪郭や透かし彫りの個所を切り取り、文様は彫るので、長方形と丸の〝穴あけタガネ〟と金槌を使って穴を開けます。これが型紙です。

この型紙を、刷り込み刷毛で銅板に写し（形刷き＝写真）外形をタガネ、ハサミ、小刀、金槌で切ります。このとき、必ず歪（ひず）みとタガネのかえりが出るので、歪みを取り、キサゲで切り口のヤスリ目を取り、滑らかにします。

平面でないものと、彫りをするものは、真っ赤になるまで〝なまし（加熱）〟、酸洗いをして清浄にします。また、曲面は、当て金をあてて所要の形に整形します。当て金の種類は、大きさ、形により無数ありますが、常時使うものはほぼ決まっています。特殊な形のものを作るときは、新しく適した〝道具〟をこしらえます。以上で、いわゆる「素地拵え」になるわけです。

彫りの作業

前回、錺金具の基本である「素地拵え」についてお話しましたが、この素地拵えがすむと、いよいよ本格的な彫りの作業に入ります。一通りの技を説明しましょう。

透し彫

文様を残して余分な部分、いわゆる〝地〟を金槌とタガネで打ち抜くか、糸鋸で切り取る方法。タガネを使うと、タガネの厚みで勾配がついて柔らか味が出ます。切り口はヤスリ掛けやキサゲを使って仕上げ、文様の細部には「毛彫（線彫）」を施します。法隆寺献納宝物金銅灌頂幡（かんじょうばん）、平等院鳳凰堂の垂木金具などに古くから使われている技法です。

蹴彫（けりぼり）

タガネを楔形に打って、文様を刻む技法で、古くはそのひと刻みの間隔が離れており、あたかも動物が足を蹴った形に似ていることからこの名が生まれたと思われます。しかし、近世になると、間隔を詰め、むしろタガネを滑らせて引くような彫りをするようになり、職人仲間で〝引く〟（文様を全部引く場合は、総引）と言っています。

これも古くから伝わる基本的な技法で、建築物に限らず、宝物、調度品などあらゆるものに幅広く使われています。

毛地彫（けじぼり）

桃山時代を代表する技法。文様以外の〝地〟の部分を、彫りの深さだけ鋤タガネで均一に平らに削り取る、非常に手間のかかる手法です。それゆえひと味違う雅な風格が現れます。二条城の帳台構や襖引手、長押、釘隠しなどにその例をみることができます。

まだまだ話は尽きませんが、今回はこの辺で。

（原文のまま）

〈この項、次号に続く〉

彫りの作業のようす＝「彫りの作業」より

栃木の〝うるし〟山からの通信

〔前号から続く〕

㈱小西美術工藝社　小西陳雄

《はと・う・からす・やまとりの小道》

（馬頭・烏山・鷲子（とりのこ）みち）

有名な石のみちしるべがある分岐点から、ほど近い山に「うるし」の植栽を始めて十数年余り、暴れ樹（ガキ大将のように大きくなりすぎた樹）から、「うるし」の掻取りをはじめたのだが、凡そ数千本の中から三百本である。漆液の歩留り一本当り五十匁として十五貫目（約五十六キログラム）。初収穫である。採れたての生漆の入った木樽を抱えて日光へ帰った。有益に使おう、どの仕事に、どの現場に生かそうか、生漆の性（しょう）もあるな、耐候性の問題の少ない建物内部の仕事かな、などなど思案しているうちに、漆掻取り名人の秋田さんがひょっこりやって来た。「勢いの良い樹ばかりだったので、試しに枝漆（えだうるし―幹ではなく太目の枝から）掻き取ってみました」と片手間に作っている美味しいコンニャクを持って来てくれた。半農・半林産の事業家だ。殺し掻きで切り倒した漆の樹は、役立たずで勿体ないネエという話になり、倒木を選んで揃えて、竹の四ツ目垣の代りに庭の境界に並べて使った。これは名案で、伐り口の木口が強く、水はじきが良く結構役に立った。

◆　◆　◆

《偉かった元県知事夫妻》

小話をひとつ。ウチのうるし山で、こんな騒ぎが起きた。飛地のうるし畑の幼木が甫場整備のブルトーザーに轢き倒されたのだ。慌てて管理人の川上さんが電話して来た。取り敢えず、駆けつけると、なんと三百本ほどの、やっと三年生位になった幼木が無くなり黒ぐろとした土壌だけになっていた。土木作業員達に文句を言ったが、てんで埒があかない。泣き寝入りかと川上さん宅へ戻ってボンヤリしていた。腹の虫が納まらないが、本業が忙しい中で、役所廻りなんてする暇がない。

その頃は、年賀状に下手な雑文を書いて臆面もなく出していたが、「栃木県は文化県などと称しているが、行政の文化度の低さはひどいもんだ」などと、この事例を並べたてて投函していたのを忘れかけていた一月の下旬頃、愚妻がソロプチミストクラブの例会で知事夫人から「県の関連職員が大変な事を仕出かして申し訳ありません。主人がお宅の年賀状を見て怒っているんです。」と話を伺ったという事を聞いて、やっと合点がいった。このところ、県の農業なんとか、土地改良のなんとかと言うお役所から電話があったり、是非お眼に掛りたい、云々と申し入れがあって、何のことかと思っていた矢先、素直なタチの自分だが、この時ばかりは臍が背中へ廻った。関連行政の方々の面会要請を拒否した。日光市選出の県議から「小西さん何で俺に黙っているんだよ。先に話してくれれば良いのに」などと言われてしまった。（もっとも、県議では話がどこかで停まってしまい、補償金とやらでシャンシャンシャンだったかも。ネ。）

大分、時間も経った頃、代表の方とやっと面会して話をした。「お詫びして弁償したいが、失われた漆樹の費用を示して頂きたい」との由。「いらない」「それでは困る」の押問答の末、「何かお望みの事があれば」との申し出なので、『それでは、県の林務関係条例の中に保護林の指定があれば「うるし」の樹を入れて貰いたい』という事で了解点に達し、若干の涙金を受け取り決着したことがあった。桧（ひのき）山、杉山の植林ばかりで「うるし」なんざ、雑木の認識しかないのかな、マイナーな植栽など切り捨てということか、と思った次第。

ところが、やっぱりこの認識は間違っていなかったのか、悲しい、ネ。（社）全国国宝重要文化財所有者連盟（通称全文連）が、「うるし」の植栽状況を全国的に調査するため、都道府県の各担当部署にアンケートを依頼したところ、回答のない県の内に栃木県も入っていたとの事で、私は全文連の事務局長に皮肉を言われましたよ。世界文化遺産だ、なんて、はしゃぐ県のお役人さんよ。地味に、黙々と、マイナーな事業をやっているところもあるんですよ。気をつけて貰いたいです、ネ。

◆　◆　◆

《掻き殺した、うるしの樹の供養に染織》

わが社の、採れたての生漆を伊勢神宮の御神宝製作に使わせて頂いた有り難い話を前号に書かせて貰ったが、所謂、掻き殺された樹木への供養にとその木部を使い、つむぎ織を手掛けている家内が糸染めをしている。

文献を調べると、嵯峨天皇の時代、うるし染めで黄の袍（ほう）を作られ、これは禁色とされて、皇櫨染（こうろせん）と呼ばれていた。この黄色は媒染に錫を使い、イエローオーカーの実に渋い色に染め上がる。この黄色の糸で「もじり織り」の着物に掬（すく）い織りで「源氏香文」を浮かせた法衣を製作し、源氏物語に深く関わられている瀬戸内寂聴師に差し上げて喜ばれた。

媒染を鉄に変えると、実に品の良いオリーブグリーンに染まる。これは、某総本山の法主様に献上し、着て頂いている。

〔この連載もこの辺りで一応終わらせて頂きます。〕

平成17年度芸術文化振興基金　技術研修会

日程及びカリキュラム

〔会場〕京都市文化財建造物保存技術研修センター

京都市東山区清水二丁目205－5　TEL 075－532－4053

		午前	午後
9月6日(火)		12時45分迄に 研修センターに参加者各自集合 受付係　大井未歩（協議会事務局）	13時00分　開会［司会 荒木かおり（運営委員）］ 澤野会長挨拶 〜 京都府教育委員会文化財保護課 課長補佐　中尾正治氏挨拶 13時30分　記念講演『彩色のある建造物』 〜 後藤佐雅夫講師　全文連事務局長 15時00分　オリエンテーリング　馬場講師 16時00分　宿泊者はチェックインして下さい。 17時00分　懇親会　（於ホテルサンルート京都）
《実技研修》　技術講師：馬場良治様（日本美術院院友）			
9月7日(水)	―第1日―	9時00分　・剥落止め工程説明 ・彩色層表面の清掃、洗浄について 〜　・実習 12時00分　昼食（自由行動）	13時00分　・剥落止め剤としての膠及び布海苔について 〜　・彩色層養生と剥落止め技術について ・技術実習 17時00分　自由行動
9月8日(木)	―第2日―	9時00分 〜　・剥落止め技術実習 12時00分　昼食（自由行動）	13時00分　・剥落止め後の補彩について 〜　・補彩色技術実習 17時00分　自由行動
9月9日(金)	―第3日―	宿舎は各自チェックアウトをして下さい。 9時00分 〜　・補彩色技術実習 11時00分　・講評：馬場講師 〜　・閉会挨拶　森本大隆運営委員 12時00分　解散	

〔訃報〕川面稜一様

当協議会の発足（平成二年）以来、彩色部会長を永年勤めてこられました。去る一月八日、薬石効無く逝去されました。享年九十一歳。

川面様は障壁画復原模写の第一人者として活躍され、昭和五十九年、京都府文化財保護基金より文化功労賞を授与、平成九年文化庁より建造物彩色選定保存技術保持者の認定を受けられ、平成十二年日本建築学会より建築学会文化賞を受賞されました。国宝平等院鳳凰堂の彩色模写・復原をはじめ、数多くの国宝重要文化財建造物の壁画模写、彩色調査復原を手掛けられ、昭和五十七年に設立された川面美術研究所で後進の指導に当たられ、数多の技術員を育ててこられました。

現在、荒木かおり様が事業を引き継がれ、現在、運営委員として当協議会の諸事業に参画して頂いております。ここに川面稜一様の御功績をたたえ、衷心より哀悼の意を表します。

川面稜一 プロフィール

研究所事業
建造物彩色調査復原
障壁画復原模写
仏画研究・制作・修復
舞台美術考案制作
レプリカ制作

学歴
昭和9年(1934) 京都市立絵画専門学校（現京都市立芸術大学）研究科卒業

職歴
昭和15年(1940) 文部省紀元2600年事業 法隆寺金堂壁画模写入江波光斑助手として参加
25年(1950) 文化財保護委員会美術工芸課の委嘱を受け模写五ヶ寺計画を立案実施
［国宝］平等院鳳凰堂扉絵の模写建築彩色復原
［国宝］醍醐寺五重塔内壁画模写
［国宝］法界寺阿弥陀堂壁画模写
［国宝］室生寺金堂壁画及び仏像光背模写
［国宝］東寺真言八祖像模写
47年(1972) 二条城二の丸御殿襖絵復原模写継続中
［国宝］北野天満宮本殿中門彩色復原
［国宝］西本願寺唐門彩色復原
［国宝］二条城唐門彩色復原
55年(1980) 比叡山東塔建築彩色［新築］
57年(1982) 有限会社川面美術研究所を設立
嵯峨美術短期大学講師
58年(1983) 成田山新勝寺大塔内部両界曼荼羅及び建築彩色
［重文］尼崎本興寺三光堂建築彩色調査復原
［重文］清水寺三重塔彩色復原
平成3年(1991) ［重文］御香宮本殿彩色復原
5年(1993) ［重文］清水寺西門彩色復原
8年(1996) ［重文］知恩院経蔵内部（12年まで）
9年(1997) ［重文］御香宮拝殿
［国宝］西本願寺飛雲閣三十六歌仙杉戸絵復原
念法金剛寺本堂等内部建築彩色
10年(1998) ［国宝］富貴寺大堂内部壁画及び建築彩色復原

受賞歴
昭和59年(1984) 京都府文化財保護基金より文化功労賞を授与
61年(1986) 内閣総理大臣より木杯授与
平成4年(1992) 舞台美術家協会より伊藤熹朔賞受賞
9年(1997) 文化庁より建造物彩色選定保存技術保持者の指定を受ける
12年(2000) 日本建築学会より建築学会文化賞を受賞

「社寺建造物美術協議会」名簿

（五十音順）　　平成17年3月

	法人名（個人名）	代表者名	住所	TEL・FAX番号
1	㈱大谷相模椽鋳造所	大谷哲秀（大谷秀一）	〒537-0011 大阪市東成区東今里2-6-20	TEL 06-6971-6571 FAX 06-6971-6511
2	㈲川面美術研究所	荒木かおり	〒616-8242 京都市右京区嵯滝本町69-2	TEL 075-464-0725 FAX 075-464-0099
3	岸野美術漆工業㈱	岸野勲	〒321-1404 栃木県日光市御幸町587-2	TEL 0288-53-3366 FAX 0288-54-0072
4	㈶木曽地域地場産業センター	田中今朝春	〒399-6302 長野県木曽郡楢川村平沢2272-7	TEL 0264-34-3888 FAX 0264-34-2832
5	㈱小西美術工藝社	小西美奈（小西陳雄）	〒108-0074 東京都港区高輪2-21-40 国際高輪ビル7F	TEL 03-3447-1481 FAX 03-3447-0736
			〒321-1431 栃木県日光市山内2365	TEL 0288-54-1198 FAX 0288-54-1196
6	㈲齋藤漆工芸	齋藤敏彦	〒270-1434 千葉県白井市大山口1-19-2	TEL 0474-91-8712 FAX 0474-91-9046
7	㈱さかい	酒井清	〒520-2331 滋賀県野洲郡野洲町小篠原7-1	TEL 0775-87-1178 FAX 0775-87-5355
8	㈱さわの道玄	澤野道玄	〒604-8232 京都市中京区錦小路通 油小路東入る空也町491	TEL 075-254-3885 FAX 075-254-3886
9	㈲鈴木錺金具工芸社	鈴木正男	〒321-1412 栃木県日光市東和町57-1	TEL 0288-53-1121 FAX 0288-54-3263
10	田村漆工㈲	田村貫一	〒420-0886 静岡市大岩4-31-14	TEL 054-249-0538 FAX 054-249-0539
11	㈱細川社寺巧藝社	細川夫美子	〒651-2242 兵庫県神戸市西区 井吹台東町1-5-13-301	TEL 078-997-7178 FAX 078-997-7179
12	邑田漆芸㈱	邑田正廣	〒607-8355 京都市山科区西野大鳥井町118-45	TEL 075-591-4137 FAX 075-502-0638
13	㈱森本錺金具製作所	森本大隆（森本安之助）	〒600-8321 京都市下京区楊梅通 西洞院東入ル八百屋町59	TEL 075-351-3772 FAX 075-361-8877
14	㈲横山金具工房	横山義雄	〒601-8394 京都市南区吉祥院 中河原里北町14-3	TEL 075-325-4861 FAX 075-325-4862

編集後記

総選挙が真近くなってきた。なにせ国家予算の半分が借金である現状では、わが業界の行く末も案じられる。補助金に支えられている伝統技術は、有難い反面生活保護家庭のようなものであり、甘んじているだけでは情けない。伝統技術は確かに個の技術であるが、個に目を奪われるあまり、個を活用し再開発する組織（企業・団体）の重要性に気づいていない。これからの伝統技術は組織の在り方によって、その命運が決まるように思う。

（道玄）